

# 同棲から始まるオタク彼女の作りかた

村上 凜

---



ファンタジア文庫

2793

口絵・本文イラスト 館川まこ

「ただいまー、……………」

学校から帰宅後、リビングの扉を開け、俺は目の前の光景に思考停止した。

ロングの綺麗な黒髪。白いフリルブラウスに、ハイウエストな膝丈の紺色のスカート、薄手の黒のストッキング。少し前に流行った『童貞を殺す服』を完璧に再現して着こなした清楚な美少女が、その上にフリルエプロンを着けて、キッチンで料理をしている。

「あ、おかえりなさいお兄ちゃん♪ ちようどご飯できたところだからね♡」

「……………」

台詞を聞いて、俺は絶句する。

「あ、それとも、先にお風呂にする？ もう沸いてるよ♪」

「いや、えっと、そうじゃなくて……………」

「ま、せっかくできたでだし、先にご飯でいいよね♪」

彼女は俺の言葉を無視して、食卓の上に料理を運ぶ。見るからに美味しそうな豚汁にハ

ンバーグ、白いご飯が並び、食欲をかき立てる匂いを漂わせる。

「はい、じゃ、いただきます！」

俺たちはソファアに隣同士に腰かけ、手を合わせた。

「ん？ 何じろじろ見て……あ、分かった！ もしかして、私にご飯食べさせて欲しいのかな!？」

「はあ!？」

「もう、しょうがないなー、お兄ちゃん。じゃ、ほら、あーん♪」

彼女が俺の口元までハンバーグを運んできて、口に押し付けてくるので、仕方なく口を開いた。

「〜っ!」

ハンバーグは思いの外熱くて、何も言えなくなる。

「どう？ 美味しい？ お兄ちゃん、今日も一日お疲れ様♡ 学校疲れたでしょう？ 妹

に思う存分甘えていいんだからね？」

「……っ!？」

彼女は口の中が熱くて涙目でハフハフしている俺の状態など気にも留めずに、俺の頭を無理矢理撫でてくる。

「よしよし、いーこいーこ♡」

「……………」

クソ熱いハンバーグを無理矢理食べさせられたときは死ぬかと思ったが、頭を撫でられているうちになんだか悪い気はしなくなってきた。

色々強引だしわざとらしすぎるけど、悪くはない……かもしれない。

「あ、あとは自分で食べるから大丈夫だ」

再び熱いのを無理矢理食べさせられたら堪ったもんじゃないので、俺はそう言ってから、自分の箸でハンバーグを食べる。

「……ん、うまい……よ」

「……っ! ベ、別に、お兄ちゃんのために作ったわけじゃないんだからね!! 自分が食べたくて作っただけだから!」

「え……………」

聞かれたから感想を言ったのに、突然彼女の態度が急変して戸惑いを隠しきれない。

「……っというか、今日連絡もなしに遅かったの、なんで……? セツかく私が料理作りながら待ってたのに……もしかして、他の女? 他の女と遊んでたの……?」

「え……え、え、え?」

今度は急に目に光がなくなつて、強い力で俺の腕を掴んだ。

「ねえ、スマホ見せてよ。他の女と連絡とってないかチェックするから」

「いや、ちよ……」

「二科お前、色々間違つてつからあああああ！」

声を大にして、盛大に突っ込んだ。

「童貞を殺す服を着て料理作って待つてるまではいいいけど……なんで妹設定でバブみ盛り込んで更にツンデレでヤンデレなんだよ!? 情緒不安定すぎだろがあ!? 属性盛り込みすぎてカオスで意味不明になってんぞおお!!」

「えっ……だつて、あんたに勧められたアニメとエロゲとエロ漫画と同人誌ではこうだったじゃん! こういうのがオタク男子に人気なんでしょ!? 全部完璧にやれてるじゃん!」

「二次元の萌えを三次元で完全に再現するとか、ただの頭おかしい奴だからな!? 参考程

度、ところどころを不自然じゃない程度に取り入れろつて意味で勧めたんだよ!」

「何よそれえ!? せっかく十回以上読み返してめっちゃ勉強したのに! セリフの練習までしたのに! 黒髪ロングのウィッグとかめっちゃ高かったしウィッグも服もこの時期に超暑かつたつていうのにいいい!」

二科は立ち上がつて激怒しながら、怒りにまかせて黒髪のウィッグをその場で勢いよく脱ぎ捨てた。

あーもう、めちやくちやだよ……。

「じゃあ、もつとちゃんと教えてよ!? どういう女子が理想なのか!」

「え……」

「あんたが言ったんだからね!? 私を、オタク男子の理想に育ててやる、つて……!」

俺一ヶ谷景虎が、同じ学校のオタクでリア充ギャルの二科心と一緒に暮らしてこんなことをしているのには、深いわけがあるのだつた――。

「どこでいいんだよな……?」

秋葉原のカラオケ店の前にズラリと列ができている。目の前までやってきて、俺は思わず誰にも聞こえないくらいの声で独り言を呟いた。

列に並ぶのは、大体俺より年上に見える男女。話している者が多く、友達同士で来ている参加者が多いことを知る。それを見て俺は、やっぱり引き返そうかという気持ちになる。だが、当日キャンセルは禁止だと書かれていたことを思い出し、覚悟を決めて列の最後尾に並んだ。

俺、一ヶ谷景虎は、今日『オタク恋活&友活パーティー』というものやってきていた。目的はただ一つ。オタクの彼女を作るためだ。

小学生でオタクになってから、二次元の女の子にしか興味がなかったが、中学に入ったあたりで様々な青春ラブコメアニメにハマり、その影響もあって、三次元の彼女が欲しい、

と思うようになった。

彼女を作るなら、オタクの女の子がいい。

アニメを軽く見る程度のライトオタクならまだしも、俺のように毎日ソシャゲなどのオタクコンテンツに多くの金と時間を費やしているようなオタクには、オタク趣味を理解してくれる同じオタクの彼女でないと厳しいと思う。

それに、趣味が合うオタクの彼女だったらオタクトークもできるし、一緒にアニメも見られるし、カラオケに行っても楽しいだろうし、もしかしたら好きなキャラのコスプレもしてもらえるかもしれない。

そこまで考えて俺は、彼女にするなら絶対にオタクの女の子がいいと思っていた。

しかし、俺の学校には俺の理想とするオタク女子は見つからない。

漫画研究部の部員はオタク女子だが、まず見た目が俺の好みではないし、同じオタクでも趣味が合わないそつだ。

俺が好きなのは可愛い女の子がたくさん出てくる作品だが、漫研女子たちは女子に人気のあるアニメやBL、女子向けソシャゲの話なんかをよくしている(盗み聞きしているわけではないが、声が大いなので聞こえてくる)。

そこで、どうか学校以外で理想のオタク女子と出会えないかとネットで調べに調べま

くり、オタク向けの恋活パーティーというものがあるという情報を得た。

街コンを主催する会社が、オタク恋活・友活パーティーという、オタクの恋人や友達を作るのを目的としたイベントを開催するらしい。色々調べて知ったが基本的にこういうパーティーは参加条件に二十歳以上という項目があるのだが、今回のパーティーは幸いにも飲み物はソフトドリンクのみの提供で、年齢制限がなかった。

カラオケのパーティールームにて、ソフトドリンク飲み放題の立食形式で自由に動き回れるというスタイルらしい。

これだ！と一気にテンションが上がり、すぐに参加を決めた。

本当は誰か男友達と来たかったが、学校で唯一のオタク友達を誘ったところ興味ないと断られてしまい、泣く泣く一人でやってきた。

つまり、今日は俺にとつて数少ない大チャンスの日なのだ。

ここへ来て日和つてどうする。今日俺は絶対に、理想のオタク女子との連絡先を交換するって決めたんじゃないか！拳を強く握って、今一度覚悟を決める。

「こんにちはー。男性一名様で宜しかったですか？」

カラオケのパーティールーム入り口で、受付のスタッフに声をかけられる。

参加費の三千円を支払い、名札をもらおう。今日呼んで欲しい名前を書いて下さいと説明

を受けた。

なんていう名前にしよう……考えた結果、とりあえず『シャドウタイガー』というSN Sでの自分のハンドルネームを書き、名札を胸に付けた。

「……………」

今まで緊張で周りの参加者を見ることもできなかったが、改めて見ると、人の多さに圧倒される。

参加者を見渡すと、まだ開場したばかりのためか、男女で楽しげに話している光景はほとんどない。

(俺の好みの、黒髪ロング清楚系の可愛い女の子は……)

目を皿のようにして、俺は参加者の女の子の顔をチェックしていく。

(……うーん、なかなか理想通りの子はいないもんだな)

「ソフトドリンクはこちらまで取りに来て下さいー！」

スタッフのかけ声と共に、参加者がドリンクが提供されるカウンターまで移動する。

そこで、気付いた。俺が女の子の顔を吟味している間に、先ほどまではみんな男女分かれて会話していたが、徐々に男女で会話をし始めていることに。

まずい。さっさと好みの女の子を見つけて声をかけないと……！

だが周りをよく見ると、少しでも可愛いと思った女の子は既に男の参加者と楽しげに会話をしていた。

やばい。完全に出遅れた……！！

必死になって更に目をこらす。まだ男にとられていない女の子は……会場の隅に、地味目な女の子二人組が二人して携帯を弄っているのが目に入った。正直好みではないが……そんなことを言っていたら、きつと今日誰とも話せないで終わってしまう。

それだけは避けたいので、とにかくまずは誰かに話しかけることから始めようと思い、俺は彼女たちのもとへ足を進めた。

「……、……………」

しかし、彼女たちの二メートル程手前まで来たところで、俺の足は止まった。そこから先へは一步も動けなくなる。

なんて話しかけたらいいんだ？　こんにちはー、今日どこから来たんですか？

いやいやいや絶対無理！　それ、ほぼナンパじゃん！

自分が彼女たちに声をかけるところを想像して、とんでもないことに気付いた。

俺、自分から知らない女の子に話しかけるなんて、できなくね？

冷静に考えたら、学校ですら女子に話しかけられない俺が、こんなアウェイな場所で、

たった一人で、知らない女性に話しかけるなんて無理に決まっているじゃないか。

なんで俺、自分がそんなことができると思ったのだろう。このパーティーに申し込んだときの自分が恐ろしい。

きつと、パーティーにさえ来ればなんとかなると思っていたのだ。あわよくば、誰かに話しかけてもらえたり、何かのきつかけで話せるだろうとか軽く考えていた。

甘かった。俺はいつだってそうだ。できもしないことをできるだろうと軽く考えてしまう。

自分を過信しすぎなんだ。これからはもう少し、自分を信じるのをやめよう。

……よし。

俺はその場で深くため息をついて、決意した。

今日は、もう帰ろう。

パーティーに申し込んで、会場までやってきて、列に並んで、受付を済ませただけでも、十分頑張ったじゃないか。コミュ障オタクの割には、よく頑張った。

自分で自分をそうやって慰めでもしないと、泣きそうだった。なんのためにソシヤゲへの課金や昼飯代などを節約して参加費三千元という大金を握りしめて、休日を潰してここまで来たのか。

「だけど、これ以上ここにいることを考えたなら、参加費を無駄にしてまでも、一刻も早くこの場から立ち去りたかった。」

俺が逃げるように出口まで足早に向かっていた、そのとき。

「きゃっ」

「……っ！ す、すみませ……」

女の子にぶつかった。

謝りながら相手の顔を見ると……。

「!? え、……!?」

見覚えのあるその顔に、思わず固まった。

見たことがあって、当然だ。一度も話したことはないが、彼女は同じ学校、同じ学年の、隣のクラスの生徒だった。

(なんでこの女が、こんなところに……!?)

二科心。

クラスは違うが、有名なので知っている。とにかく目立つ派手な女子だ。

友達は多く、ビッチっぽい見た目で、リア充男子からの人気が高く、それでいて服装髪以外の学校での態度は至って真面目、成績も良いと噂されているハイスベックリア充女だ。

今一度姿を見る。

派手な色の髪。肩の出ている、赤いミニワンピース。高いハイヒール。

両耳には大きなピアス。化粧などに疎い俺でも分かるほど濃く派手なメイク。

この『オタク恋活・友活パーティー』という場所には到底似つかわしくない。

なんで、リア充ソビッチの二科心が『オタクオフ会』なんかにいるんだ!?

気付けば、二科心は俺の顔を見て、なぜか真っ青な顔になっていた。

「なんか見覚えあるような……あんだ、もしかして学校の……!?」

二科が戸惑った様子で口にする。

「あつ、2♡さん、ここにいたんですね!?!」

そこへ、男二人組が足早に近づいて声をかけてきた。

「いきなりいなくなるからどこへ行ったのかと思いましたがよ〜!」

男二人組は、顔、服装、話し方共にかにもオタクという感じであり(俺も人のこと言えないが……)、話しながらどんどん二科心に近づいてくる。

「……っ！」

二科は彼らを見て、明らかに顔を引きつらせている。

「あ、す、すみません。ちょっと知り合い見かけたもので……」

「へ!？」

二科は俺の腕を引つ張ってそんなことを言い出した。

「知り合い?」

「はい、オ、オタク友達で……ちょっと二人で話したいので、失礼しますね!」

惚けている俺の腕を引つ張って、二科は足を進めた。二科の突然の行動に戸惑いを隠せない。

満員電車以外で女子とこんなに接近したことが初めてで、正直腕を掴まれているだけでドキドキしているのだが、二科から香水なのかシャンプーなのか分からない匂いが漂ってきて、クラクラする。

何か言いたげな男二人組をその場に残留して、二科は俺をパーティールームを出たところの階段の踊り場まで引つ張り出した。

人目に付かない場所で、二科はやっと俺の腕を放してから俺の顔を見る。

「多分……同じ学校だよな?」

なぜか顔を真っ青にして、俺の顔を見ながら尋ねた。

「えっと、名前分かんないけど……なんでここにいんの?」

「お、俺は、出会いを求めてここに来ただけで……。そっちこそなんでここにいるんだよ? オタクでもないのに……」

なぜ俺が悪いみたいなのを言っているのか分からず、俺は精一杯の強い口調で言い返した。

しかし、落ち着いた状況で、先ほどより少し明るい場所で改めて二科を見ると、確かにリア充男子から人気なものもよく分かる。

一年の時から可愛いと有名だったので知っていた。

客観的に見たら、芸能人においてもおかしくないくらい、ビジュアルのクオリティは高い。顔の作りが抜群に整っていること、スタイルが良いことは勿論、髪形やメイクなどの完成度なんかも、他の参加者の女性と比べても飛び抜けているということが、お洒落に疎い俺でも分かる。

だが、何を隠そう俺はビッチやギャルが苦手だ。できるだけ関わりたいくない。

俺は学校でオタクを隠していないために、中学の時ギャルグループにオタクなことをバ

カにされたりからかわれたことがある。それがトラウマになり、それ以降、なるべく学校では気配を消して教室の隅でこそこそと生きるようにしている。

つまり俺にとって、どれだけ可愛かろうと、ギャルという生き物は恐怖の対象でしかない。

それに、二科心は俺の好みのタイプとは正反対だった。俺の好みは黒髪ロング清楚系美少女である。二科とは真逆だ。

「出会いを求めて……？ オタク女子との出会ってこと？」

二科は俺の言葉を聞いて不思議そうに質問した。

「あ、ああ」

「そっか……じゃ、あんたもオタクなんだ……」

二科は今までの警戒心が露わな表情から、心なしか少しだけほっとしたような表情になった。

あんた、も……？ 今二科は、そう言ったのか……？

「……………ま、見るからにそういう感じだもんね」

「……………っ！」

二科は俺の姿を頭の天辺から足のつま先までじろじろ眺めると、そう言い捨てた。



見るからにそういう感じ、だと!?

俺は今日このオフ会に向けて、自分なりに精一杯のお洒落をしてきた。それなのに、なんでそんなことを言われなければならないのだ。

「……って、というか、そっちこそなんでこんなところにいるんだよ?」

「なんでって……」

二科はばつが悪そうな顔で俺から目を逸らした。

それからため息をついて、何かを決意したかのように顔を上げて俺を見る。

「休日こんなところにわざわざ来る理由なんて、一つしかないじゃん……」

「私も、自分と同じオタクの彼氏が欲しくて来たの」

「……っ!」

『自分と同じオタク』……? この、どう見てもビッチにしか見えない外見のリア充女が、オタク、だと!?

それでもって、俺と同じようにオタクの異性との出会いを求めてここに来た、って?

確かに、一見リア充にしか見えない奴が、意外と深夜アニメを見てたりゲームをしてた

りつてことはあるが……まさかこんな、学校ではリア充の頂点に君臨してそうな女が、その類いだとは思わなかった。

「ねえ、お願い……! あんたがここにいたことも学校では言わないでおいてあげるから、私にここに来てたことも絶っつつ対誰にも言わないで!」

二科はすごい気迫で俺の方へ迫ってきた。

「え?? あ……」

二科のあまりの迫力に、動揺のあまり、うまく返事ができない。

「私、学校では絶対にオタクだつてバレたくないの! それに、彼氏探しにほっちでこんなパーティーに参加したつてのも、クラスの子たちにバレたら死ぬほど恥ずかしいし!」

「べ、別にいいけど……学校でオタクだつてバレるの、そんなにまずいのか……?」

思い返してみると、クラスのイマドキっぽい女子たちだつて、オタクというレベルでは決していないだろうが、アニメやソシャゲの話くらいはしているのを聞いたことがある。

それに、二科ほどのリア充ヒエラルキー頂点に君臨している女であれば、オタクであろうがオタクでなかるうが、今更周りにバカにされたりすることもないのではないだろうか。

「まずいに決まってるでしょ!」

「で、でも、クラスの派手な女子たちだつてたまにアニメの話とかしてるんじゃない……」

「あれは、全っ然オタクとかじゃないから！ ちょっとアニメ見てる子がいるだけ！ 同人誌とかコミケとかコスプレとかそういう深いこと全然知らない、ニワカ中のニワカ！ そういう子が周りに『うわーほんとこいつってアオタだよねーうけるー』とか言われてんの！ そのレベルだったらちよっと弄られる程度で終わるけど、私レベルのガチオタだったらバレたらマジで終わるから！ キモがられてどん引きされて絶対ハブられるから！」

二科は息継ぎもせずにごい気迫で一気にそこまで話した。

今の話と、この必死な様子を見るに、二科自身はニワカオタなどではなく、本当のガチオタ、ということなのだろうか……？

「わ、わ、分かった……。とりあえず、黙ってればいいんだな？」

その勢いに押されて動揺しつつ、俺は返事をした。

「ほんと？ほんとに黙っててくれんの!？」

二科はやつと顔を上げたが、とても不安げな表情で俺を見ている。

「あ、ああ」

「！も、もしかして……黙っというてやる代わりに条件がある、とかそういう……？」

「は？」

二科はなぜか赤くなつて、言いくそにそんなことを言い出した。

「だ、だから例えば、何でも俺の言うことを聞け、とか、俺の性奴隷になれ、とか……」

「バツ、何言つ……一体何考えてんだよ!? 変な漫画の読み過ぎじゃねえのかつ!？」

俺は動揺と驚きのあまり、思わずでかい声を出してしまった。

それって、完全にエロ漫画やエロ同人でよくある展開じゃねえか！

「と、とにかく！ そういう条件とかなしに、に……二科がオタクだつてこと、誰にも言うつもりないから！」

二科は俺の言葉に、少し驚いた様子で俺を見た。

「ほ、ほんとに……？」

「ああ」

俺は二科の言葉に頷く。

「そ、そう……助かる」

二科は不安げな表情で俺を見ていたが、やがて少しほっとした様子でそう言った。

人の秘密を知ったからといって、それをネタに脅すなんて、恐喝じゃねえか。ラノベの横暴系ヒロインなんかがそういうことをしているが、俺はそんなことをするほど悪趣味ではない。

「はー、にしても改めてマジでびびった。まさかこんなところで学校の人に会うなんて……」

二科は壁によりかかって大きくため息をついた。

驚いたのは俺だって同じだ。

「でさ、今更だけどあんたって名前なんだっけ？」

「……！ い、一ヶ谷景虎」

「へー。全然聞いた覚えなかった」

「悪かったな陰キャで！」

「ちょ、そこまで言っつてないじゃん」

二科は俺の言葉に笑いを堪えた表情で返す。

「シャドウタイガー……？」

それから、俺の胸元のハンドルネームが書かれた名札を見て、読み上げた。

「ちよっと待って、シャドウタイガーって……景虎だからシャドウタイガーってこと？」

ちよw あいたたたたw 中二ネームwwww」

「……?! う、うううううるせえな！ 覚えやすいだろ!! 咄嗟にそれしか思い浮かばなかつたんだよ！」

二科に爆笑されて、急に猛烈に恥ずかしくなってくる。

よくゲームやるときに使っている名前なんだが、そんなに笑われるほど中二ネームか、

これ？ クソツ、改名しねえと……。

「つーか、おまえこそ『2♡』って……人の名前を笑えるほどのネーミングセンスじゃねえだろ！」

二科の胸元の名札を見て、思わず声を荒らげた。

「え、なんで！ どこが！ めっちゃセンスいい名前じゃん！」

二科心で『2♡』って、何の捻りもねえしそのまんますぎじゃねえか。

「で、一ヶ谷は、今んとこどうなの？」

気を取り直して、という感じで、二科が俺に尋ねた。

「どうって、何が？」

「だから、このパーティー！ いい出会いはあつたかって聞いてんの」

「いい出会い……」

そう言われてやっつと、今の状況を思い出した。

二科と遭遇した衝撃ですっかり今の状況が頭から抜けかけていたが、今俺はこのオタク恋活パーティーにて、心が折れて帰ろうとしていたところなんだった。

「いや、うーん、まあ……正直微妙かな。特別可愛い子とかまだ見てないし」  
正直に、女の子に全く話しかけられないので帰ろうとしていた、ということはいいたくなかった。

「はあ？　こんなに女の子いて可愛い子見てないとか、どんだけ上から目線？　とりあえず何人かと会話はできたわけ？」

「……………」

二科の質問に答えたくなくて、俺は二科から目を逸らす。

「は？　何、シカト？」

「いや、その、……、……だ、……」

「声ちっさ！　何？　なんて？」

「……その、まだ誰とも……」

「え……!?　誰とも!?　今日誰とも喋ってないの!？」

俺は二科のセリフに仕方なく頷いた。

「だ、だって仕方ないだろ！　女子は話しかけられるの待てばいいから楽だろうけど、男は自分から話しかけなきゃいけないから大変なんだよ!！」

「何で逆ギレ!?　ってかそんなこと言うなら、男子こそ自分の好みの女子に話しかけられ

るんだから、そっちの方が良くない!?　女子は好みの男子探す前に、どうしても話しかけてきた人と話すことになっちゃうから、全然話したい人と話せなくて辛いし……」

「まず話しかけてもらえるだけでありがたいだろ!?　みんなが楽しそうに話してる中、自分だけぼっちで誰とも話せないでいる辛さが分かるか!？」

俺が二科の言葉に腹を立て、言い争いになりかけた、そのとき。

「そろそろ終了時間となりまーす!！」

「えっ!？」

会場の部屋からそんな声が聞こえてきて、俺と二科は同時に驚きの声を上げた。  
終了だど!？」

俺と二科は慌てて会場の部屋に戻る。

参加者たちはスタッフに誘導されてどんどん出口へと向かっていた。

「ご移動にご協力お願いします!！」

人混みに流されて、俺と二科も会場の外へと出る羽目になった。

「この後カラオケでも行く!？」

「あ、いいね!！」

会場の外では、男女のグループがそんな話をしている光景が目に入った。俺と二科は互いにどうすることもできず、ただただその場に立ちすくむ。

結局二科としか話せないままにイベントが終わってしまった……。まあ、あのまま帰ろうとしていたのだから、どちらにせよ収穫ゼロで終わっていたことには変わりないが。

「嘘……パーティー、これで終わり……?」

気付けば隣の二科は、真っ青な顔で周りを見渡していた。

「滅多にないチャンスだつてめっちゃ気合い入れてきたのに……! 服もネイルも新調して、イメトレだつて何回もしたのに……! それなのに、全然好みじゃない二人と、あんなと喋つて、それだけで終わりなんて……嘘でしょ?!」

二科のショックを受けている様子を見て、こいつも今日のパーティーに俺と同じくらい、もしかしたらそれ以上に、期待して気合いを入れてきたのだということが分かった。

「で、でも、お前だつたら彼氏なんて学校とか友達（しょうかい）の紹介とかでいくらでも作れるんじゃないのか?」

俺と違つてリア充（じゅう）でモテモテなこいつであれば、わざわざこんな場所に来なくたつて出会のチャンスなんて無限にあるように思える。

「さつき言ったでしょ、私学校ではオタク隠（かく）してる、つて。尚且（なまか）つ、彼氏にするなら絶対

オタクがいいつて。そしたら、学校で作るのも無理だし、友達に紹介してもらうのも無理じゃん!」

「ああ、まあ確かに……」

「だからわざわざオタクの出会いの場を探して、勇気出して申し込んだのに、それなのに……」

……ん? 待てよ。つまり、つてことはもしかして……。

「じゃあ、い、今まで彼氏できたことは……?」

「だーかーらー、オタクと付き合いたいのにおタクの知り合いゼロなんだから、無理だつたんだつてば!」

つまり……俺と同じく、恋人いない歴イコール年齢（ねんれい）なのか!?

こんな見るからにビッチっぽい女が……マジかよ!

い、いや別に、だからといってこいつが俺の好みとは真逆であることは変わりないし、だからどうつてことはないのだが……一気に親近感がわいたな。

オタクの恋人が欲しいけど、学校では出会いがない……つまり、二科も俺と全く同じ（じょうじょう）状況（きぼう）だったのか。

リア充と陰キャで、学校での立場は百八十度違うつてのに、皮肉なものだ。

俺たちは互いに肩を落としながらも、とりあえず駅に向かって歩き始めた。

「ねえ……一ヶ谷って、オタク友達とかいないの？」

二科の顔を見ると、期待に満ちた眼差しで俺を見ていた。

もしかしてこいつ……俺のオタク友達を紹介してもらおうと期待してるのか？ そこまで出会いに必死なのかよ。

「学校に一人いるくらいで……あとはツイッターで繋がってるだけとか、中学の時の友達とかチラホラ……」

「へえ〜！」

明らかに目を輝かせて食いついている。ゲンキな奴だ。

まあ、こいつが彼氏に求める条件が本当に『オタクであること』だけなら、中学の時の友達などでオタクの男を紹介することは可能だ。だが……。

「一応参考までに聞いとくけど……お前が期待してるオタク男子ってどんなだよ？」

「えつと具体的には、黒髪で、目立たないんだけどよく見ると格好良くて、清潔感があって、クールなだけで彼女には優しく、ゲームがめっちゃ上手くて、ニワカオタクとかじゃないちゃんとオタクで、彼女がただオタクでも腐ってても許容してくれて、む

しろ女性向けオタクコンテンツも好きだとお良し！ それから一途で、線が細くて背が高く、コスプレとかも一緒に付き合ってくれて……」

「そんなオタクいねーよ！」

思わず言葉を遮って突っ込んだ。

「ただオタク男子に理想を抱いてやがんだよこいつ！」

「えー!? いやいや、いるでしょ！ 別にめっちゃイケメンを求めてるわけじゃないんだよ!! 男性声優によくいるちよつと冴えないイケメンレベルでいいんだよ!」

「男性声優デイスってんのか？」

「じゃああんたはどんなオタク女子がタイプなわけ？ なんかさつき、今日可愛い子いなかったー、とかってめっちゃ上から発言してたけど」

話しているうちに秋葉原駅昭和通り口に着いたので、俺たちは通行人の邪魔にならないように柱の側に寄って立ち話を続けた。

「俺のタイプ、か……。そうだな……」

改めて、想像を膨らませる。俺の理想のオタク女子は……。

「まず黒髪ロングの清楚系美少女は絶対必須条件で、俺とオタク趣味が同じ子、かな。具体的にはアニメでもソシヤゲでも美少女系コンテンツが好きな子が良くて、B Lとか乙女ゲーが好きな子はちよつと……。彼氏できたこともなければ男友達もいなくて、身長はちよい低めで色白で、あとできれば、同い年か年下で、バブみがあつて優しい……」

「バカか？」

「……………えっ!？」

一瞬、二科の言った言葉の意味が理解できずフリーズした。

「バカか? 今バカって言われたのか? 俺。」

見れば、二科は蔑んだ眼差しで俺を睨んでいる。

「あのさあ、それマジで言ってるの? 頭大丈夫? そんな子現実にいると思う?」

「お前にだけは言われたくねーよっ!」

「っていうかさあ、まずあのパーティーにあんなにたくさん女子がいて、『特別可愛い子がない』って……あんた、どんだけ面白いなの!? 自分の顔鏡で見たことある!？」

「なっ……………!？」

い、今俺、めちゃくちゃ酷いこと言われてないか?

「べ、別に俺だつて自分をイケメンだなんて一切思っていないし、っていうか、聞かれたから理想のタイプを話しただけなのに、なんでそこまで言われなきゃならないんだよ!？」

「イケメン云々っていうか、あんたつて全然自分の身なりに気を遣ってないじゃん。それなのに、自分は見た目がいいオタク女子がいつて言ってるわけでしょ? そこがおかしいって言ってるの!」

「クッ……………!」

二科の言葉の刃が容赦なく俺の胸にクリティカルヒットした。

「ぜ、全然身なりに気を遣ってない……? 今日パーティーだから、一応、自分の持ってる服の中で一番マシな服着てきたんですがそれは……!」

震え声で必死に反抗する。

「それが一番マシな服……………!?! そのクソダサイ英字の謎にロックっぽいTシャツとか、めちゃくちゃ安そうなジーンズとか、ドクロのネットワークレスとか、小学生のころから履いてそななスニーカーとか……………いかにもザ・オタクファッションのテンプレだよな!」

「……………っ!?! オ、オタクファッションのテンプレ……………!?!」

自分の身に着けているアイテムを全て否定されて、足下が震えてくる。

「あなたはまず、こういうところに来る前に、ファッション誌買ったたり、渋谷とか原宿で同世代の男子がどんな服着てるのか調べるところから始めるべきじゃない?」

「……くっ……」

悔しさのあまり、拳を握りしめた。

言い返したいが、服装に関しては二科がお洒落であることはさすがに俺でも分かるので、返す言葉もない。

「でっでも……オタク女子だって、変に垢抜けるキャラ男とかよりは、同じオタクと付き合いたいって思うんじゃないのか!？」

「そりゃあそういうオタク女子は多いよね。だから今日のパーティーにもあれだけたくさんの女性参加者がいたんだし。まあ多分、大抵のオタク女子の理想は……同じオタクで、女子のオタク趣味にも寛大で、むしろ興味持ってくれて、ちゃんと身なりに気を遣ってる、できれば自分の好みの外見のオタク男子、って感じ?」

「え……」

「間違っても、あんたみたいな外見からして一目でオタクって分かるタイプは好かれないだろうし、それより何より……BLとか乙女ゲーが好きなのはちよっと、って言ってたよね? 自分もオタクのくせに女子のオタク趣味は全否定、ってマジ最悪だから。そんなん

だったら趣味を認めてくれる非オタク男子の方が数千倍いいから」

「な、な……!？」

ただでさえショックを受けていたのに、その上に更に追い打ちをかけられる。

別に俺だって、腐女子や乙女ゲー好きの女子を否定しているわけではない。ただ、自分が付き合うならそうでない女の子がいいって言ってるだけで……。

でも、その考え自体が良くないということなのか……?

「っていうか、なんでお前に全オタク女子の好み分かるんだよ!？」

「そりゃあ私自身がオタク女子だからね」

つまり二科は、オタク女子の視点から発言してるということか……?

「っーかなあ、さっきから言いたい放題言ってくれてるけど……俺がオタク女子に好かないってなら、お前だってオタク男子から好かれるタイプじゃねえからな!」

「え……?」

ここまで散々攻撃されて、やられっぱなしでは終われない。溜まったヘイトを今こそ発散するタイミングだ、と感じた。

「お前がさっき言ってた……黒髪で地味だけどよく見ると格好良くて、ゲームが強いオタク……だったけ? 万が一そういう男がいたとしても……そういう奴はお前みたいな女は絶

「好きにならないからな！」

「な、な……!!? なんであんたにそんなこと分かるのよ!？」

「俺自身がオタク男子だから、オタク男の趣味は手に取るように分かんだよ！ オタク男子はなあ、ほとんど漏れなく、清楚系の、オタク男子が好きなのコンテツが好きで一緒に語れる、大人しくて可愛らしい女の子が好きなんだよ！ つまり、お前とは真逆！」

「私とは真逆!?! 清楚系……?？」

二科はシヨックを受けた様子で、ブツブツと呟いている。

「……そ、それって、確かな情報なんでしょうね……?？」

「まあ、大体のオタク男子には当てはまると思うけど」

「そこまで断言するなら……そのオタク男子にモテるオタク女子、つてのを、私に教えなさいよ！」

「えっ……?？」

二科は涙目で俺の方を見たかと思つたら、突然強気でそんなことを言い出した。

「あんたがちゃんと確かな情報を教えてくれるなら、私もオタク女子にモテるオタク男子

つてのを教えてあげる！ それから……オタク女子と出会えそうな場所も、一緒に探してあげてもいいわ」

「ほ、本当か!？」

「その代わり、あんたも私に全力で協力してよね!?! どういう女子がオタク男子からモテるのか教えたりとか、あとは……あんたの友達で私が好きなオタク男子がいたら紹介したり、どういう場所に行けば私の理想とするオタク男子と出会えるのか探したりとか……!!」

「!!」

今日まで、毎日理想のオタク彼女が欲しいと思いつつも、一体どうしたら作れるのか分からず、何もできない日々を過ごしていた。

だから、オタク女子である二科が俺に協力してくれるというのなら、こんなに心強いことはない。

「わ、分かった！ 俺も全力で、お前にオタクの彼氏ができるよう協力する！ 俺の友達にはお前の好みのタイプのオタク男はいないだろうから紹介は無理だけど……オタク男子がどんな女子が好きとかは教えられるし、出合いの場も探してやる！ だから……お前も協力してくれ！」

オタク男子が好むオタク女子のことは、嫌というほどよく分かる。そういう面では、二科に協力できるはずだ。

今日、せっかく勇氣を出してオタクの恋活パーティーに行つたというのに、何の成果も得られず落ち込んでいたが……ここへ来て、全くの無意味ではなかった、と感じた。

彼女候補は見つけられなかったが、同じ目標を持つ協力相手を持つことができた。

それが、ムカつくことばかり言ってくる、よりによって俺が一番苦手なりア充ギヤルでも、今までのように何も分からず一人で行動するよりは、ずっと心強い。

「よし、そうと決まつたら……早速私のうちに来てよ！」

「ああ……え!? い、家!？」

俺は二科の言葉に、自分の耳を疑つた。

\* \* \*

「うお……」

二科の家の前に到着して、家を見上げて思わず声を漏らす。

何やら立派な家ばかりが並んでいるので、こちら辺は所謂高級住宅街という場所なのだ

ろろが、周りの家に負けず劣らず、二科の家も大きくて立派だった。

「ママにはこれから友達連れてくるってライン送つていたから」

「あ、ああ……」

いきなり家に来いと言われたときにはびつくりしたが……ちゃんと話を聞いてみると、単に、次の出会いの場を探すのに二科の家のPCで調べよう、という話だった。

二科のスマホの、今月のデータ通信の残量が僅かだったようで、外だとWiFiも安定してないので、家のPCを使おうという発想に至つたらしい。

正直、俺は今のこの状況に激しく動揺していた。

いくら調べごとをするだけとはいえ……いかんせん、女の子の家に遊びに行くのなんて、覚えている限り幼稚園児以来である。

親御さんに変に思われたり彼氏と勘違いされたりしないのだろうか。俺はどういう態度でいればいいんだ？

「……!! あれ? 鍵かかっている……」

玄関で扉を開けようとして、二科は言葉を漏らす。

「あ、ママからライン来てた」

制服のポケットからスマホを取り出して、確認する二科。

「あ……そっか、今日友達とお茶してるんだっけ」

「え……」

「ま、いつか」

二科は特に気に留める様子もなく、スマホを仕舞ってから財布を取り出し、中から鍵をだして扉を開けた。

ちよ、ちよと待てよ。つまり、それって……。

心臓の音が大きくなる。手が震えそうになる。自分でもびっくりするくらい動揺を隠しきれない。

「？ 何固まってんの？」

二科は扉を開けて家の中に入りながら、微動だにしない俺を不思議そうに振り返る。

「い、い、い、いや……え、えっと、その……」

なんでこいつ平然としてやがるんだよ。誰もいない家に二人つきり、って……それ、ま、ずくないか？

いや別に俺は、こいつのことなんてなんとも思っていないし、二人つきりだからってどうもないけどさ、でも、高校生の男女が誰もいない家に二人きり、って……！

「え……ちよ、ちよと、あんた……何意識し出してんの!? ちよ、マジやめてくん

い!?! ただ調べるだけだつてのに……」

二科は俺の様子に俺が動揺していることを察したらしく、ドン引きした様子で辛辣な言葉を投げかけてきた。

「は、はあ!?! 別に意識とかしてねえし！ 親がいない間に勝手に入っていいのかって思ってただけだろ！」

その様子に、カッとなって慌てて言い返した。

クツツ、いちいちムカつく反応を返してくる奴だな。こんな奴相手に動揺していた自分に腹が立ってきた。もう一切何も気にしないことにしよう。

「ただいまー」

「お、お邪魔します……」

二科の後ろに続いて家の中に入り、廊下を進んで扉を開いた。

広くて綺麗なリビングを突っ切って階段を上がり、いよいよ二科の部屋までやってくる。

二科の部屋の扉を開けると、なんともいえないフローラルないい香りがしてくる。さっさ何も気にしないようにしようと思ったばかりなのに、童貞には刺激が強すぎて一瞬意識が遠のきそうになった。

俺は小三頃までは女子とも普通に話せていたが、その頃に徐々にオタクに目覚め、それ

以降、女友達なんて一人もいなかった。同世代は勿論、近所のおばさんですら女性というだけで会話するのに緊張する。

それなのに、女の子の部屋で二人きり、なんて……果たして無事に帰ってこられるのだろうか。

「あっ……」

そこで突然、二科が何かを思い出したかのように俺の顔を見た。

「はあ……」

ガツカリしたかのような顔でなぜかため息をついた。

「な、なんだよ!？」

「いや……ごめん、こつちの話。初めて部屋に上げる男子は彼氏が良かったなーって……。よりによって……あ、うん、なんでもない」

「よりによって、何だよ!? お前が家に来いって言い出したのに失礼すぎねえか!？」

二科の言葉に頭にきて言い返す。

しかし、初めて部屋に上げる男子、って……男を部屋に上げたのこれが初めてなのかよ。マジで、今まで男と親密になったことないのか……。人は見かけに寄らないもんだな。

「……………」

気を取り直して、二科の部屋を見る。  
白とピンクを基調としたデザインの壁紙やインテリアで、なんとも女の子らしい部屋だった。

本棚には少女漫画が並び、壁にかけられたコルクボードには友達との写真が貼られており、ベッドにはハートのクッションやぬいぐるみが置かれている。

普通の、イマドキの、女の子らしい部屋。

俺は違和感を覚えた。

「オタクっぽさが欠片もない部屋だな」

「ああ……私、家族にもオタク隠してるから」

「え!? な、なんでまた?」

「色々あって、うちの親、オタクにいい印象持たなくてさ」

二科は俺から目を逸らして少し寂しそうに言った。

そういう親って、やっぱりいるんだな。ということは二科は、学校でだけでなく家でもオタクを隠してきたのか。

二科がどの程度のオタクなのか分からないが、もし自分だったらと考えると、常に趣味を隠して生きるなんて、相当窮屈で大変な生活だろうと思う。

「あ、そーだ。いいもの見せてあげる！ 人に見せるの初めてなんだけど……」  
突然二科がウキウキした様子で言い出した。不覚にも、一瞬その様子を可愛いなんて思っってしまう。

人に見せるのは初めて？ 一体俺に何を見せるつもりなのだろう。

二科は机の引き出しの中から鍵を取り出して、クローゼットの扉まで移動し、持ち手付の鍵穴に差し込んだ。

クローゼットにわざわざ鍵がついているのか？ 一体何でまた……。

二科が鍵を開けて、クローゼットを開ける。

「……っ!？」

中を見て、俺は絶句した。

本棚には、大量の漫画。漫画雑誌やアニメ雑誌、ゲーム雑誌。アニメのBD-BOX。

声優のライブBD。CD。

アクリルキーホルダー、丸まったままの、恐らくポスターやタペストリーかと思われるもの。

男性キャラの、ぬいぐるみ多数。様々なサイズのフィギュア。

「ちよっ、なんじゃこりゃあ!？」

フィギュアが並んでいる棚の一部に、思わず目を疑う光景があった。

イケメンキャラのフィギュアのだが、ほぼ全裸のような格好で顔を赤らめているのである。

「あっそれはねー、『ドラマティカルメーカー』っていう超人気BLゲーの初回特典のフィギュア！ 超出来いいでしょ!？ 主人公の『緑葉』っていう総受けキャラなんだけどー、エロいでしょ!？ 顔もめっちゃ可愛いしこの腹筋から下半身にかけてのライン超シコいでしょ!？ 初回特典が欲しいがために発売日に並びに行つてめっちゃ大変だったんだからー!？」

二科が今までの様子と一変して、声は少し低くなり、興奮気味に早口で一気に得意げに語り出した。

ちよ、待て、女としていいのかってレベルの発言してるけど大丈夫か!？

こいつ、急にガチオタじゃん。むしろこの早口で喋ってる様子とかただのキモオタじゃん!？ いつもの学校での二科とはまるで別人……。

「っーかお前、ナチュラルにBLゲーとか買つてんのかよ!？」

「え、別にそんな普通に買うでしょ」

「お前な……え、ちよ、なんだこれ!？」

動揺する俺の目に、フィギュアよりも更に理解に苦しむ物体が飛び込んでくる。壁にバッグがかけられているのだが、バッグには大量の缶バッチやキーホルダーが取り付けられ、元の生地がほとんど見えない程埋め尽くされている。そのグッズは全て同じキャラのものだった。

金髪のイケメンキャラで、男子アイドルゲームか何かのキャラだと思いが、女子向け作品には疎いので詳しくは分からない。

「これ、痛バってやつか……!？」

痛バッグ……ツイッターで見たことはあるけど、本物を見たのは初めてだった。

同じキャラのグッズを大量に持っているのは分かるにしても、缶バッチなど全く同じ商品がいくつも鞆を埋め尽くしており、狂気染みている。

「なんで同じ缶バッチが大量についてるんだよ？」

「橋本薫のグッズは無制限回収してるから」

「無限回収……!」

恐ろしい言葉をオウム返しした。無限回収……言葉の通り無限にグッズを回収するってことだろうか。

二科は、俺以上にやばいオタクだったということがこの短時間でよく分かった。

「あとね、あとねー!」

「いや、もう十分分かった! 大丈夫だ!」

二科が引き出しを開けようとしたのを必死に止める。なんとなく、ここで止めておいた方が自分の身のためだと思った。

「クローゼットに鍵がかけられてた理由がよく分かった……!」

「まあ、親にバレたら気絶もんだからね、これ」

さつき、親がオタクにいい印象持っていない、と言っていたことを思い出す。

「でも……学校でオタ隠して、家でも隠して、つてそれ、結構しんどくねえか?」

「そーなの? 昔からずっとこうだから、慣れちゃった。あんたは家で、家族にオープンなの?」

二科はクローゼットを閉めて鍵をかけてから、部屋にある床に座る用のクッションの上に腰を下ろし、俺にもクッションを渡して座るように促す。俺も座って、話を続ける。

「ああ。一緒に住んでたときも全く隠してなかったな」

「……? 一緒に住んでたとき?」

「あ、ああ……今俺、一人暮らしなんだ」

「一人暮らし!? 高校生が一人暮らしして……何そのアニメの設定みたいな話!」

「父親の海外赴任が決まって、でも俺は絶対日本から離れたくなかったから、絶対日本に残りたいって言い張って、必死で説得したんだよ」

両親と妹が海外に引越して、一人暮らしを始めてから、半年が経つ。

父親の転勤が決まった当初、俺も家族と来るように強く言われた。

しかし……父親の赴任先は、インド。

インドじゃ日本のテレビなんて当然観られないから、アニメはネットで観ることになるのだろうが、調べたところ、インドは現状あまりネット環境が整っていないらしい。それに、もしネットができたって観たいものが上がっているとは限らないし、そもそもアニメを違法で観るのは好きじゃない。

それに加え、ネット環境が整っていないと、ソシャゲもネットもSNSもできない。

日本の新しい漫画やゲームだって、買うことができないんじゃないだろうか。

俺は小学生でオタクになってから、常に日本のアニメや漫画、ゲームと共に生きてきた。日本のオタク文化を心から愛している。今更オタク文化と離れて生きていくことなど、考えられない。そんなの、何を楽しみに生きたらいいのかわからない。

強くそう感じて、両親に訴えた。『オタク文化と離れるのは嫌だ、一人で家事もできるし勉強も両立するから、日本で一人暮らしをさせて欲しい』と。

最初は当然、反対された。まだ高校生なんだから一人暮らしなんて無理だ、一緒に来い  
と何度も強く言われた。

だが長期に亘り毎日根気強く説得して、一人で頑張って家事も覚え、両親に家事ができるようになったところを見せているうちに、ついに両親が折れた。

親父の海外赴任が終わるのは、予定では約二年後。俺が高校を卒業した後だ。

そこまで言うなら二年間、頑張って一人で暮らしてみろ。親父は俺にそう言った。

極端に成績が落ちたり、長期休みに親が様子を見に日本に戻ってきたとき、荒れた生活を送っていたら、すぐに海外に連れて行かれるという約束で、俺は今両親に学費と生活費を送ってもらいながら、一人暮らしをしている。

慣れないうちは家事と学校、勉強を両立させるのは大変だったが、オタク文化と離れて暮らすことを思ったら頑張れた。今ではすっかり慣れたものだ。

といっても、料理はたまに簡単なものを作る程度で、スーパーや弁当屋、総菜屋、コンビニなんかで済ませることが多い。

母親に、一人暮らし中、毎日料理をする必要はないが、身体に悪いものは食べるなどか、栄養を考えると色々言われたので、一応それは守っている。

あとは週末に掃除や洗濯をまとめて片付ける。部活にも入っていないので、やってみた

ら案外できた。

「へー。意外と根性あんだね。オタクの鑑つてやつじゃん」

俺が簡単に経緯を説明すると、二科に感心された。

「でも確かに、気持ちほめっちゃ分かる。私も海外転勤なんて絶対やだもん！ ネットが自由にできないなんて論外だし、好きなアニメはすぐに観たいし、好きなキャラのグッズとかコスプレ衣装とかは海外じゃ買えないだろうし、私が同じ立場でも日本に残りたいって思うだろうなー……」

「ああ、オタクだったらそうだよな」

「あ……そうだ、長話してる時間はないんだった。早速本題に移らなきゃ」

二科はローテーブルの上のパソコンの電源をつける。

「出会いの場、探さないと！ なんて検索しよっかなー、『オタク 出会い』とか……」

二科が、次に俺たちが行くオタクの出会いの場を探そうとした、そのとき。

下の階から、扉を開ける音が聞こえた。

「あ、ママ帰ってきたのかな……」

二科が立ち上がり部屋の扉を開け、下の階の様子を確認する。

「……っ！」

直後、慌てた様子で扉を閉めた。

「？ どうした……？」

「やばい、パパまで帰ってきてる……！ なんで……!? あんたのことバレたら色々面倒かも……」

二科は俺の顔を見て真っ青になる。

「ママにバレるのは別にいいけど、パパは……彼氏とか好きな人いないのか、つてしょっちゅう聞いてくるから、勘違いされたら色々面倒なことになりそうで……」

「え、それって、俺がいののバレたら親父さんに殺される系？」

「いや、それはないんだけど……うちのパパ、恋愛脳っていうか……私にも彼氏できたら真っ先に紹介しろってよく言ってる」

そこまで話したところで、足音が部屋に近づいてきた。

「やば！ 階段上がってくる！ とりあえず一ヶ谷隠れて！」

「ええ!? 隠れるって……」

二科は慌てて立ち上がると、俺の腕を引っ張って立たせる。

「ほら、早くこの中に！」

二科が先ほどのオタクグッズの隠されていたクローゼットとは別のクローゼットを開け

る。そこには服がたくさんハンガーにかけられているが、下には空間があり、身体を屈めれば辛うじて入れそうだ。

そのとき、扉がノックされ、心臓が跳ね上がった。

「心、帰ってるの?」

「ちよ、ちよっと待って! 今、着替えてるから!」

俺は慌てて屈んでクローゼットの中の下空間に入り込む。二科がクローゼットを閉めた。暗闇の中、二科の服からいい匂いがしてきて、妙な気分だ。

「き、着替え終わったよ!」

完全にクローゼットが閉まってから、二科のそんな声が聞こえた。

扉が開く音がして、僅かに足音が聞こえてくる。

「ど、どーしたの!? パパ、今日会社は……」

「ああ、今日は代休だったんだ。心、今いいか? ちよっと大事な話があるんだが」

「あら? 心、今日友達の家に来るって言ってなかった?」

「あ、それ、急遽ナシになったの! それより、大事な話……?」

二科の親父さんと思しき人の声は、なんだか深刻そうに聞こえた。

「じゃあ、パパから……」

「ああ。心、急な話で悪いが……来月から海外転勤が決まった」

「えっ!」

か、海外転勤……!? 突然の話に俺まで驚く。

「場所はイギリスだ。母さんにも心にも……付いてきて欲しいと思っている」

「……! 転勤……? イギ、リス……?」

来月から、海外に転勤……。つまり、二科の家は家族で海外に引っ越すと……?

なんだよこれ……まるで半年前の俺と同じような状況じゃないか。こんなことってあるのか?

「期間は一年半だから、心の高校卒業前には日本に戻ってこれると思う」

「や、やだ……」

二科が泣きそうな声で呟いたのが聞こえてくる。

「私……ママとパパと離れるのは嫌だけど、それよりも……日本から離れたくない!」

「え、心!? あなた、何言ってるの!」

「私一人で日本に残りたい!」

「……本気で言ってるのか? どうしてそんなに日本に残りたいんだ?」

「だ、だって……友達とか、趣味とか……」

俺には二科の今の気持ちが痛いくらいよく分かる。俺自身が、半年前全く同じ心境だったから。

さつき二科にオタクグッズコレクションを見せられて、二科がどれほどガチなオタクであるかよく分かった。それはもう、この俺が引くほどに。

「趣味？ 趣味って何なの？ イギリスではできないの？」

お母さんの質問に、二科は黙り込んでしまう。

家族がオタクに偏見があるなら、ここでオタク趣味のことなんて言えるはずがない。むしろ、言ったら余計に日本に残ることなんて許されないだろう。

「わ、私の友達で、家族が海外に引っ越して、一人暮らししてる人がいるの！ その人もちゃんとやってるみたいだし、私だって、家事と勉強ちゃんと両立するから！」

それってもしかして、俺のことか？

「家事と勉強の両立……それは大した問題じゃない。それよりも、高校生の女の子が一人暮らしなんて、そんな危ない真似、させられるわけがないだろう？」

「……………」

話を聞きながら、思う。親から海外に引っ越すと聞かされたとき、本当にショックだった。

海外の言葉が話せないとか、現地で友達できなそうとか、行きたくない理由はたくさんあったけど、やっぱり一番嫌だった理由は、オタク文化と離れることだ。

今の二科の気持ちが一番よく分かるのは、他の誰でもない俺だ。

しかし、『高校生の女の子の一人暮らしが危ない』、そう言う二科の親御さんの気持ちも分かる。

ならば、今この状況をどうにかするには……………。

「……………!? きゃあああっ!?」

「うわあっ!? だ、誰だ!?」

気付けば俺は、いても立ってもいられなくて、勢いよくクローゼットを飛び出していた。二科のお母さんと親父さんが、突然クローゼットから出てきた俺を見て悲鳴をあげる。

こんなことしたって、無駄かも知れない。むしろ逆に反感を買ってしまう可能性の方が高い。だけど、それでも俺は……………！

「い、一ヶ谷……………!?」

「は、はは初めまして、僕は二科さんと同じ学校、同じ学年の一ヶ谷景虎と申します！」

「ど、どうしてクローゼットに……………!?」

不審者を見るかのような表情で、親父さんは俺を見ている。無理もない。

「えっと、その……僕は決して怪しい者ではありませんし、に、二科さんと後ろめたい関係なわけでもありません！ 今日はその、遊びに来させてもらってただけで……」

「……！ そ、そう！ きよ、今日、友達が遊びに来るってラインしたでしょ!? 男子だったから、パパを驚かせちゃうかなって思って、咄嗟に隠れてもらって……!」

二科は俺に続いて狼狽しながらも説明した。

「えっと、それで……今勝手に話を聞かせてもらってしまっただけで、突然こんなことを言うのも失礼な話なんですけど……」

二科も、両親も、驚いた表情のまま俺の顔を見る。

「その……二科……いや、心さんの一人暮らしが心配でしたら、僕の家で暮らすのはどうでしょうか!?」

「は……!?!」

「い、いやその！ 偶然にも僕の家には部屋が余っておりますですね、その上僕の住んでる地域は治安が良くて、変な事件とかも全く聞かないですし……」

「い、一ヶ谷……!?!」

二科の両親は俺の話を聞いてポカンとしており、二科も驚いた様子で見ている。俺自身、自分の発言、行動が信じられない。

「ただ、今の二科と両親のやり取りを聞いていて、今二科を助けられるのは俺しかいないんじゃないだろうかと思った。」

俺の家は二階建ての一軒家で、部屋が余っているのは本当だ。家族も二年は帰ってこないから、二科の両親が海外に行っているという一年半の間だったら、親が日本に戻ってきたときさえどうにか誤魔化せば大丈夫なはずだ。

しかし……。

自分で言ってから、思う。いくら治安がいい地域に住んでいると主張したところで、親父さんからしたら、一番危ないのはお前だよ！ って話だよな。

当然俺は二科に何かするつもりなどない。というか、色々な面で物理的にできない。信じてもらえないかも知れないけど、そう主張しなければ。そう考えていたそのとき。

二科が俺の顔を見て、難しい表情で固まっていた。

「君は一体、心とはどういう……」

二科の親父さんが俺に何かを質問しようとしたが、二科が口を開いて遮る。

「パツ……パパもママも、心も早くパパとママみたいな最愛の人を見つける、見つけたらすぐ家に連れてきなさい、ってよく言ってるよね!? 今まで恥ずかしくて黙ってたけど、この人……一ヶ谷君が、私にとつてのそういう人なの!」

「……え?」

二科の言葉に、きつとご両親よりも俺が死ぬほど驚いた。

に、二科……突然何を言ってるんだ!?

「最愛の人ができたなら、その人を何よりも大切にきなさい、常日頃からそう言ってたよね!? だから、その……私にとつて一番大切なのはこの人で、だから私、絶対に日本を離れたくないの!」

「こ、心……」

ご両親は驚いた表情で二科と俺の顔を交互に見た。

俺は酷く混乱しながらも、二科の考えていることがなんとなく分かってきた。

つまり二科は……俺が自分の彼氏だと言うことで、日本に残りたいと両親を説得しようとしているのか。

だけどそんな話、逆効果なんじゃないのか?

付き合っているだけならまだしも、高校生が同棲したい、だなんて、普通に考えたら余計に親父さんに反対されるんじゃないか……。

「心……。日本に残りたいのは、そういうことだったのか……」

親父さんは目を細めて二科を見ると、大きなため息をついた。

「……父さんと母さんが出会ったのも、高校生の頃だった。父さんと母さんはクラスメイ卜で、当時不真面目だった父さんは、あるうことが自分とはタイプが全く違う、真面目でクラス委員長だった母さんを好きになってしまったんだ」

二科のお父さんは、なぜか突然昔話を始めてしまった。

「ヤンキーもどきだった父さんは、母さんのご両親に気に入ってもらえず、交際を反対された。一度は駆け落ちをしようとしたこともあったが、長年に亘って母さんのご両親を説得し続けて、やっと結婚することができたんだ。だから……今の心たちの気持ちは、痛いほどよく分かる」

二科のお父さんは、寂しげな笑みを浮かべて、俺と二科の顔を見た。

え、ちょっと、この人一体何言い出してんの!?

「君のことは追々知っていきたいと思っているが、心が選んだ男なら間違いないだろう」  
二科のお父さんは、俺の目を見てそう言った。

「え、ええ……!!? えっと……?」

「心……どうしてもこの一ヶ谷くんと離れたくないんだな?」

二科の親父さんは、視線を俺から二科に移して質問する。

「う、うん……!!」

「……そうだな、心と離れて暮らすなんて……正直、今は考えたくもない。海外転勤は限られた期間とはいえ、耐えられるかどうか……。だがな、恋人と離れたくないと泣く心を、恋人と無理に引き離すなんて真似は、父さんはしたくない。心の気持ちは、若い頃散々周りに交際を反対されてきた父さんと母さんが、痛いほどよく分かるからな」

「ちょ、マジか……!!? この親父さん、物わかり良すぎじゃねえのか!? というより、なんていうんだろ、まさに恋愛至上主義って感じで、すげえ考え方が偏ってるというか……。そういえば二科が、うちのパパは恋愛脳だから、って言ってたっけ……」。

まあ、親父さんは認めても、お母さんの方はさすがに認めないよな? 見た感じ、堅い感じだし……。

そう思って、二科のお母さんの方を見る。二科のお母さんは俺の方を少し見てから、二科の方を見て口を開いた。

「……心は、高校生になった今でも彼氏どころか男友達の一人もいないみたいで、お母さ

んずっと心配してたの。心にも、早くお母さんにとってのお父さんみたいな人が現れたらいいのになって、ずっと思ってた。なのに……まさか、お母さんに内緒でこんなに素敵な恋をしてたなんてね」

二科のお母さんは、今までの硬い表情から打って変わって、微笑んで二科を見て話している。

「心、おめでとう。とはいえ、まだ高校生なんだから、不純な行為は一切駄目。それさえ守れるなら、お母さんも許しましょう」

二科の両親の物わがりの良さに、驚きのあまり言葉も出ない。

「……心を、宜しく頼む」

二科の親父さんに、優しい笑顔で声をかけられて、俺は……。

「えっ!? あ、えっと……はい……」

完全にその場の雰囲気にもまれて、そう答えてしまったのだった。

元はといえば俺が二科に持ちかけたことだが……とんでもないことになってしまった。

それから、その後改めてリビングに移動して、夕飯をご馳走になりつつ、じつくりと二科の両親と話すこととなった。

両親双方からの質問攻めに遭い、二科とどうやって付き合うことになったのかとか、その場で必死にねつ造した。

そして最終的に、「じつくり話してみてもやっぱりいい若者だ」となぜか親父さんに気に入られ、俺と二科が同居することを正式に認められた。

「ただし、二人とも……さつき母さんも言ってたが、高校生の間は、いくら結婚を前提に付き合っても……さつき母さんも言ってたが、一線を越えるのは……」

親父さんが主に俺の方を見て、暗い表情で言いくさうに話す。まあ、言いたいことは分かる……。

「はあ!? パパ、何キモいこと言ってるの!? そんなのあるわけないじゃん!」

二科が心底気色悪そうに全力で否定する。こいつ……そこまで酷い言い方する奴があるかよ!? 善意で助けてやった俺に対して……!

「……? そ、そう、か……?」

二科の思いがけない反応に、親父さんは戸惑いながら返事をする。確かに、付き合ってる彼氏に対する反応にはおかしいから……。

「……だ、だって、いくら結婚前提だろうが、結婚前にそういうことするのはマジあり得ないから!」

二科は顔を赤くしてきつぱりと言いつつ切った。その様子に、今の発言は二科の本音なのだろうと分かる。こいつ……こんな見た目ののに、そこらへんしっかりしてるんだな……。

「ほ、僕も同じ考えなので、絶対大丈夫です!」

二科に続いて、俺がそう答えると、親父さんは少し安心したようだった。

俺の両親とも話がしたいと言われたが、今海外にいるし、俺から言っておくので大丈夫です、と強く言っておいた。

二科の両親が日本に戻ってくるのは、一年半後。それまで二科はうちに住むことになった。

二科の家族が海外に行く少し前に、二科は俺の家に引っ越すこととなった。その日取りも決まった。

その日は二科の親父さんが車で送ってくれ、精神的に疲れ切った状態で帰宅した。

二科が、俺の家に住む……!?

他人、それも付き合ってもない女子と暮らすって……。

この俺が女の子と二人きりで暮らすなんて、できるのか……？

パニック状態のままベッドに倒れ込み、様々な思いを巡らせつつ、疲れ切っていたがと  
りあえずこれだけはやらなければという大事なことを思い出し、スマホのソシヤゲを開い  
てログイン報酬をゲットしてから、最低限のデイリークエストをこなした。

しかしどうやら相当疲れていたようで、気付けばそのまま寝落ちしていた。

続きは、11月20日発売のファンタジア文庫で！

© Rin Murakami, Mako Tatekawa 2018